

片転用錘などが加わりバリエーションが豊富になる。この頃に打欠石錘はほぼ消滅すると考えられる。こうした変化の背景には、漁法の変化や、環境変化に伴う、獲得魚種の交替などの原因が考えられるが、漁業技術の解明についてはまだまだ理解不足の観が否めず、今後、土壤洗浄により、微細な魚骨をも見逃さずに採取するなどの努力を行うことで、より具体的な様相が明らかになるものと考えられる。

第2節 弥生前期～中期層の出土遺物

今回の調査では、濃黒色粘土層中から、多数の突帯紋系土器や弥生土器の資料を得ることができた。また63図のPo628のような東日本系の土器が出土している。目久美遺跡ではこれまでの調査でも、東日本系土器の出土がみられることから、目久美遺跡において、こうした土器を持つ人々との交流があったことを窺わせる。また42図のPo416も黒色の胎土に渦巻状の紋様が施されるもので、外来的な要素を持つ土器と考えられる。突帯紋系土器については口縁部の破片が出土しており、それらを見ると、突帯に刻みを施すものは出土量が少ない。また32図のPo183や51図のPo483のように突帯が2条に分岐するものが見られる。このうち51図のPo483は突帯に細かい刻みを施すもので、第1次調査でも類似したものが出土している。壺については、高さ70cmにもなる大型のもの(47図Po419)が出土した。こうした弥生前期の大型壺の出土例は、鳥取県内では長瀬高浜遺跡などに見られるが、完形品にまで復元できるものは少なく貴重な資料を得ることができた。甕については、器形や調整手法などにかなりのバリエーションがみられ、今後検討すべき課題と考えられる。土製品については、土笛や土器片転用錘や土器片転用紡錘車、匙などが見られる58図のPo626は楕円形の土製円盤に2箇所穿孔するもので用途については不明である。岸本町久古第3遺跡の口別所地区から類似したものが出土している。また58図Po623は蓋状の器形で、頂部に横方向から穿孔する。鏡形土製品であろうか。

木製品は、濃黒色粘土層中から丸木舟断片、針状木器などを検出しているが、数は少ない。また水田の下層にある土器溜り中からは、漆塗り木製品の断片と、木鏃、鍬の断片が出土した。丸木舟はスギを使用しており、舳先側に段を設けている点に特徴がある。また漆塗り製品は木部が腐食しており、漆の部分しか依存していなかった。このためどのような製品であったのか不明であるが、おそらく装身具のようなものではなかったかと考えられる。

石器は、石鍬の出土が目立つほか、短冊状に加工した打製土堀具、磨製石斧、大形石包丁、石製紡錘車、人形石製品、砥石などが出土している。このうち石製紡錘車は緑色の石材を加工したもので、表面には擦り跡が確認できる。弥生前期の遺跡から出土する事例は、タテチョウ遺跡、西川津遺跡、目久美遺跡、長瀬高浜遺跡などにあり、いわゆる大陸系磨製石器の影響が大きいものと考えられるが、紡織技術の変革が背景にはあるようだ。また石槍状の石器は、サヌカイト製で、長さ10cm程のものである。これまでの目久美遺跡の調査では、石製武器類の出土はあまり顕著ではなかったため、珍しい資料であると考えられる。

人形石製品は、胴体の部分と右手と見られる部位が残っており、頭部や足部は欠損している。安山岩製で全体に研磨した痕跡があり、体の中央部には放射線状に擦痕が残る。こうした擦痕が残っていることから骨角器などの製作に関連した砥石であるという可能性も考えられる。全国的に見ても弥生時代の石製偶像は検出例が少なく、断定的なことは言えないが、今後の出土類例の増加を待って結論を出すべきであろう。今回は偶像としての可能性を提示することで注意を呼びかけたい。

第3節 加茂川下流域における水田遺跡の動向

1982年に実施された目久美遺跡第1次調査において水田遺構が検出されてから、早や20年もの歳月が流れた。その間に山陰地方では、鳥取県会見町口朝金遺跡、米子市長砂第1遺跡など、周辺での水田検出事例が増え、また最近では、プラントオパールや花粉などを手がかりとした自然科学分析を実施する機会が増加し、水田遺構に

対する認識は、この20年で大いに高まったと言えるだろう。しかしながら、そうした調査にしても、水田に付属して作られる畦畔、水路、堰などの構築物の検討や、集落間の動向からみた水田経営のあり方などを明らかにする取り組みについては、あまり積極的にはなされていなかった。今回実施した第8次調査をはじめ、最近の調査では目久美遺跡の所在する加茂川下流域において、堰や木製農具を出土する遺跡が見つかり、この地域の弥生遺跡が点から線へとつながり始めている。ここでは、こうした遺跡を概観し、米子平野に分布する水田遺跡の実態と、そこから明らかになった問題点について述べる。

時期区分・・・弥生時代を前期、中期、後期の3期に区分し、中期を前葉、中葉、後葉に細分する。年代の決定は出土した土器により、土器の編年は、清水編年に依拠しているが、様式内での細分にはこだわっていない。本稿で扱う水田遺構は、一般に出土する遺物が少なく、細かな時期区分を設けることは混乱を生ずる可能性があるため、大まかな区分にとどめている。基本的に報告書に記載された年代と相違するものではない。

目久美遺跡の水田遺構・・・第1次調査で検出された水田は、弥生前期末から中期末までの時期に計3面の水田が築かれている。上層にある中期末段階の水田は、48枚の小区画水田が検出され、水田直上は氾濫砂層によって被覆されていた。中層の水田は中期末水田の下層に部分的に被覆砂層があり、この層を鍵層として検出した。下層にある前期末段階の水田は水平堆積する粘土層を耕作土としているが、畦畔は検出されていない。ただ小量ながらプラントオパールが検出され、足跡の群集があることから、人為の活動が認められ、水田跡の可能性が高いものだとされている。第1次調査での水田遺構は、中期末の水田が最も残りがよく、水路や畦畔の構造などが判明している。また微高地に面する水田の下層において、帯状に分布する土器溜りが形成されている。これは、集落で生じた廃棄物が微高地縁辺の湿地に投棄されたため、帯状に分布する結果となったためと考えられる。このため上層は水田を構築するために埋め立てられているものと考えられる。これまでに目久美遺跡は土器の出土が多い水田であると言われていたが、水田の一部が土器溜りの上に作られているためである。

第6次調査では、弥生中期、後期初頭の畦畔を検出した。この調査では、弥生前期のプラントオパールを少量含む黒色粘土層が水平堆積しており、1次、8次調査でも検出されている層と同一のものと考えられる。また弥生中期に堆積した洪水層を切って、幅6m、深さ3mの大規模な水路が構築されており、ボーリング調査の結果、全長1km以上の長さになるものと考えられる。位置的な関係から、池ノ内遺跡からの水流もここに接合するものと考えられるので、この水路の規模はさらに大きくなるものと考えられる。

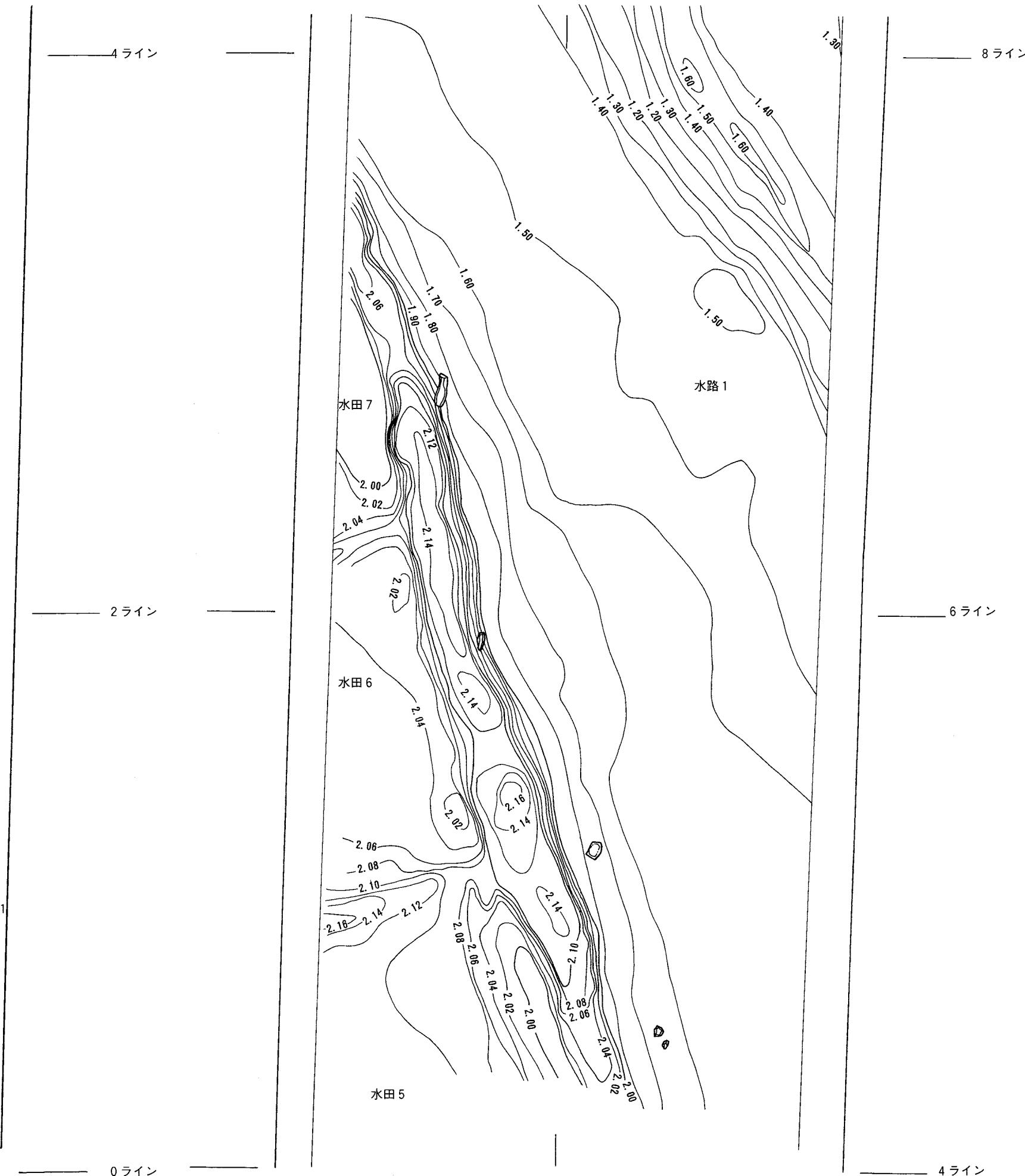
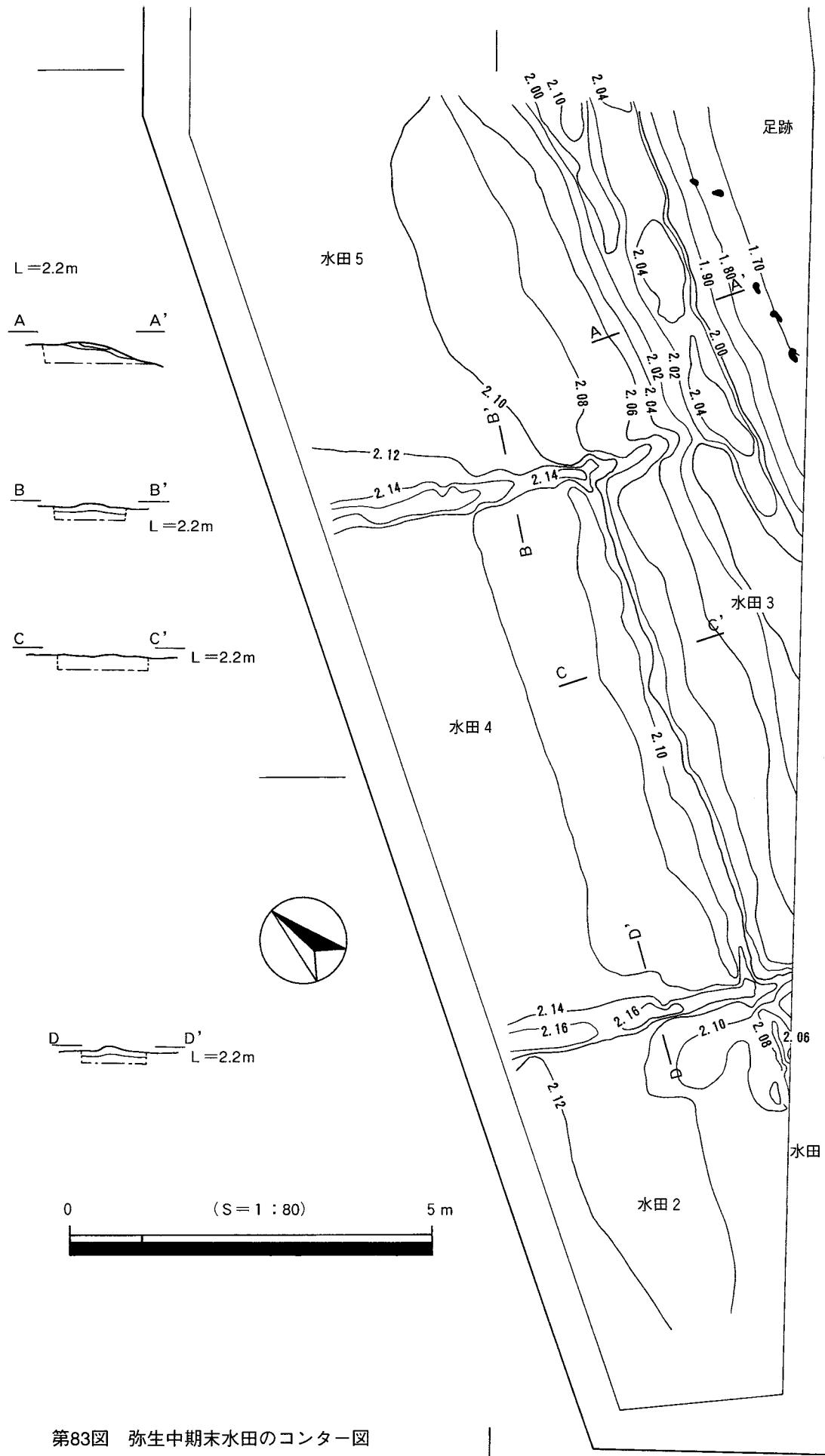
第8次調査では、弥生中期末の水田と水路を検出した。第84図に平面図を示している。検出した水田は7面で、畦畔の形状は第1次調査で検出された畦畔と同様のカマボコ形を呈する。長方形の区画が水路に沿って並ぶようで、配列も第1次調査の水田と類似しており、第1次調査の弥生中期末の水田と同時期に洪水砂によって埋没したものと考えられる。

水田の下部構造・・・目久美遺跡の水田は、炭酸鉄の集積が水田下層に見つかる事例はあるものの、マンガン、鉄分の集積層が検出される事例はまれである。水田土壌の下層はグライ化が進行しており、また水田雑草の分析からも、湿田か半湿田であったと考えられる。こうしたことや、低湿地に立地していることから、水田に付属して作られている水路は、排水を主目的として作られていたもので、潤沢に水が供給されていたと考えられる。

加茂川下流域の遺跡

宗像前田遺跡・・・この遺跡は加茂川の谷地に立地しており、ここから弥生時代中期の堰が検出された。堰は、河川の中に杭を打ち込んで作られており、平面形は馬蹄形を呈し、幅23m、奥行き10mである。構築された時期や埋没した時期は不明であるが、規模が大きいことから、加茂川流域の集落に伴うものと考えられる。

東宗像遺跡・・・加茂川右岸の丘陵斜面に立地する、数棟の竪穴住居によって構成される小規模な集落である。



第83図 弥生中期末水田のコンター図

時期は弥生中期。住居内から磨製石剣が出土しているほか投石用とも考えられる小礫が出土している。

長砂第1遺跡・・・加茂川左岸の丘陵先端の微高地に位置する水田遺跡である。弥生前期末～中期前葉の遺物が多く出土しているが、出土状況は目久美遺跡で確認されている土器溜りと同様の傾向を示す。水田遺構は、畦畔状の盛り上がりが検出されているが、保存状態が悪く全体の様子については不明である。水田の時期は明確にされていないが、弥生中期前葉以降のものであろう。

長砂第2遺跡・・・2時期の水田遺構が検出されている。上層水田は、3枚の水田が確認され、1枚の面積がそれぞれ30m²、38.4m²、25m²と推定されている。畦畔の高さは6cm、幅40cm前後であり、形状は方形の区画を指向している。下層の水田は、残存状況が悪く、面積や広がりが不明であるが、畦畔の高さは5～6cm、幅25～40cmである。水田面の傾斜は、上層、下層とも南から北へ緩やかに下降しており、この方向に取水されていたものと考えられる。また、下層水田では、河川内に杭を打ち込んで作られた堰状の遺構が検出されている。水田への水の供給を目的に作っていたものと考えられるが、粗砂によって被覆されており、大部分の構築物は流出しているものと考えられる。水田の時期は、下層が弥生前期末～中期前半、上層は弥生中期後葉～後期初頭の期間に営まれたものと考えられている。

長砂第4遺跡・・・加茂川右岸の丘陵裾に位置する、低湿地遺跡である。縄紋晚期から弥生前期の土器や弥生後期の土器、木製農耕具が出土している。分析の結果から水田遺跡の存在が推定されているが、分析の内容や結果について示されていないため詳細は不明である。

長砂第3遺跡・・・長砂第4遺跡に隣接する丘陵斜面に位置する。弥生前期と弥生後期の土器が多量に出土しているが、中期の資料が見られないことから、集落は一時断絶するものと考えられる。調査では竪穴住居1棟が検出され、埋土中から管玉の未製品が出土している。

池ノ内遺跡・・・目久美遺跡の東に位置する水田遺跡である。水田の時期は弥生後期から古墳後期に至る6面が検出されている。目久美遺跡の水田が中期末の洪水により、放棄された後に水田耕作が開始されるものと考えられる。このため、目久美遺跡の水田を管理していた集団と同じ集団が水田の経営に関与しているものと考えられる。水田の耕作土、畦畔には、シルト、砂を用いたものがある。周囲を丘陵に囲まれた盆地状を呈しており、湿地性の植物遺体の堆積層が広く分布している。

四日市町遺跡・・・加茂川右岸、砂丘の後背地に形成された弥生中期の遺跡で、多量の木製品が出土している。報告書未刊行。

錦町第一遺跡・・・加茂川右岸に形成された砂丘の後背地に位置する。この砂丘の形成時期は明らかではないが、縄紋後期の遺物が出土しており、これ以降に形成されたものと考えられる。弥生時代前期と弥生時代中期後半から後期の遺物が出土しており、当該期の集落遺跡と考えられる。明確な遺構は検出されていないが、土器の出土量が多く、規模の大きな集落ではないかと考えられる。遺跡の立地から、砂丘の後背湿地を水田として利用していたのではと想像されているが水田跡は検出されていない。

米子城跡下層遺跡・・・米子城は、加茂川の河口の南部に位置する湊山、飯山に築かれた近世城郭で、武家屋敷地は加茂川左岸の河口域の氾濫砂洲上に作られた。この武家屋敷の下層から、弥生時代の遺構や遺物が見つかっており、弥生前期から弥生終末にかけて、集落が展開していたものと考えられる。これまでの調査では久米第一遺跡、米子城跡1次、2次、5次、6次、7次、21次、25次、27次調査で弥生土器が出土しており、遺構については6次、21次、33次の各調査で掘立柱建物、土坑、水路などが見つかっている。検出された遺構が少なく、遺跡の性格については不明であるが、3次調査で、縄紋時代晚期から弥生時代前期の土器を含む粘土層からプラントオパールが検出されたことから、水田遺構の存在が推定されている。また21次調査では、畦畔状の遺構も検出され、微量ながらプラントオパールが検出されている。米子城跡の下層には、加茂川の堆積作用によってもたらされた砂層との間層に腐食を含む粘土の水平堆積層が分布していることが判明しており、27次、33次、36次調査でも見つかっている。いずれの調査でも畦畔や水路が伴う事例がないことと、農耕具の出土がないことから、水田遺構の存在を裏付けるものとはなり得ないが、将来的に水田跡が検出される可能性は考えられる。なお、弥

生終末期の資料には2次、6次調査で畿内系土器が出土しており、周辺の遺跡と比較しても異質な存在であり、遺跡の性格の解明が待たれる。

遺跡の動向・・・弥生前期の水田は今のところ確認されていないが、長砂第4遺跡において、石鍬と共に突帯紋土器と弥生前期の甕が出土しており、水田遺構が存在した可能性が指摘されているが畦畔などの遺構が確認されていないため断定は出来ない。確実なところでは、目久美遺跡1次調査で弥生前期の包含層上面から足跡の群集が確認されており、水田に伴うものと考えられている。また6次調査で実施された、プラントオパール分析の結果からも弥生前期層での水田の存在が推定されている。どちらの場合も、上層の被覆層が水田の耕作土と同質の粘土であり、砂による被覆が行われていないため、畦畔を検出することが困難な状況である。こうした状況は長期間継続して水田耕作が行われていたためと考えられることから、長期にわたって水田が維持されていたことを示すものと考えられる。また目久美遺跡では石鍬の出土が顕著に認められるが、木製農耕具の出土は少なく、どのようにして耕作していたのか不明である。むしろ整然とした水田区画は形成されず、自然の湿地帯を利用して耕作していたのではないかと考えられる。

中期には、弥生中期前葉に長砂第1遺跡において、畦畔と堰を伴う水路が構築されている。目久美1次調査第2水田、長砂第2遺跡の水田もこの時期に相当するものと思われる。このころに木製農耕具はほぼ全ての器種が出揃い、この段階で水田による農耕が行われていたと考えられる。中期中葉から後葉にかけては、宗像前田遺跡において大規模な堰が作られており、加茂川下流域への水の供給に関与していたものと考えられる。宗像前田遺跡には、東宗像遺跡が最も近い距離にあるが、小規模な集落であり、単独で管理していたものとは考えにくいため、下流の目久美遺跡や米子城跡下層遺跡との関係を考慮しなければならない。中期段階の水田は目久美遺跡と長砂第2遺跡以外では検出されていないが、両遺跡は近接した位置関係にあり、水の管理において深い関わりをもっていたと考えられる。

後期には、目久美遺跡の水田が洪水で埋まり、放棄される。その代わりに隣接する池ノ内遺跡で水田が作られはじめる。新たに池ノ内遺跡で水田を開拓した集団の集落は特定できていないが、自然災害によって集落の移動や再編成などの動きが想像され興味深い。周辺では長砂第3遺跡で中期末から後期初頭頃に集落の形成が見られるため、丘陵部への集落の移動が起こったと考えられる。なお弥生後期に至って農耕具の中でも3刃のナスピ形鍬の出土が増加し、古墳前期まで使用されていたことが確認できる。逆に広鍬や鋤などは減少するようで、農耕技術に変化が見られるようだ。また池ノ内遺跡では田下駄の出土が目立ち、かなりの湿田であったと考えられる。ここも弥生後期に3度にわたる洪水が襲い、その都度、被覆した砂層の上面を水田として利用している様子が確認されている。目久美遺跡では後期に大規模な水路が構築されており、度重なる水害に対して激しく抵抗していた証拠と考えられる。また目久美遺跡で見られたような大規模な水路の掘削から、この地域における水利や労働力の統率を行う支配者層の存在が推定される。目久美遺跡近辺では、今のところ傑出した墳墓や、環濠遺跡などは見つかっておらず、こうした支配者層の出現を裏付けることは出来ないが、こうした調査を積み重ねていくことで、解明される問題もあると考える。また、この地を襲った洪水について、自然環境の変化から読み取る試みもなされており、集落の移動、廃絶といった一連のプロセスが自然科学の分野から明らかにされる可能性もある。政治的な動向とも合わせて、今後解明すべき問題であろう。

小結 加茂川流域での弥生時代遺跡の調査事例はこの20年で増加し、次第に遺跡の様相が明らかとなってきた。特に水田跡の調査は当時の生産技術の解明のみならず、組織的な生産体制への転換を示す資料であり、今後も水田を始めとする生産遺跡の調査を継続していく必要があろう。水田遺跡の調査は発掘技術としても高度な技術と忍耐力が要求されるものだが、自然科学の協力も受けつつさらに技能に磨きをかけ、より具体的な様相を明らかにしていきたい。